



ガイド

小地域福祉活動とウィルス感染対応

～地域で支える地域のふくし～

何かできることは無いかな？

何か良い方法を教えて欲しい！

あの人お家でどう過ごしているかな？

不安が募るばかり…

リスク対応はどこまでやれば良い？

地域での活動再開の希望×安全対策

社会福祉法人 竜王町社会福祉協議会



1. 小地域福祉活動について

小地域福祉活動は、地域住民の参加・協力により様々な活動を行いながら、身近で顔の見える者同士の関係をつくり、つながり強めていき、必要時には公的な在宅サービスや相談支援機関に結びつけながら、誰もが安心して暮らすことができるような地域社会を作る活動です。また、大規模災害等が発生した時に住民同士が手を取り合い助け合うことができるよう日頃の活動の積み上げが重要とされています。

◎小地域福祉活動の内容

地域住民の参加・協力のもとで進める小地域福祉活動について、安心のある地域社会づくりに向けて以下のような活動を提案してきました。

◆ふれあい交流活動

- ・いきいきサロン活動
- ・子育てサロン活動
- ・おたっしや教室（健康増進活動）
- ・コミュニティカフェ など

◆声かけ見守り活動

- ・声かけ見守り活動（さりげない見守り、チラシの配布時、交流活動への参加の声かけなど）
- ・近助事業（災害時要配慮者支援の仕組みづくり）

◆当事者へのたすけあい活動

- ・日常生活支援活動（草刈り、ゴミ出し、電球の交換、外出支援など）

◆その他の活動

- ・福祉広報誌の発行、住民福祉アンケート
- ・座談会、福祉講座、福祉体験教室、介護教室、ボランティア講座
- ・活動グループ作り、ミーティング、交流会、
- ・福祉マップ・防災マップの作成、行政や社協との懇談会
- ・福祉バザー、役員会の開催、福祉委員会の定例会、住民懇談会の開催

など



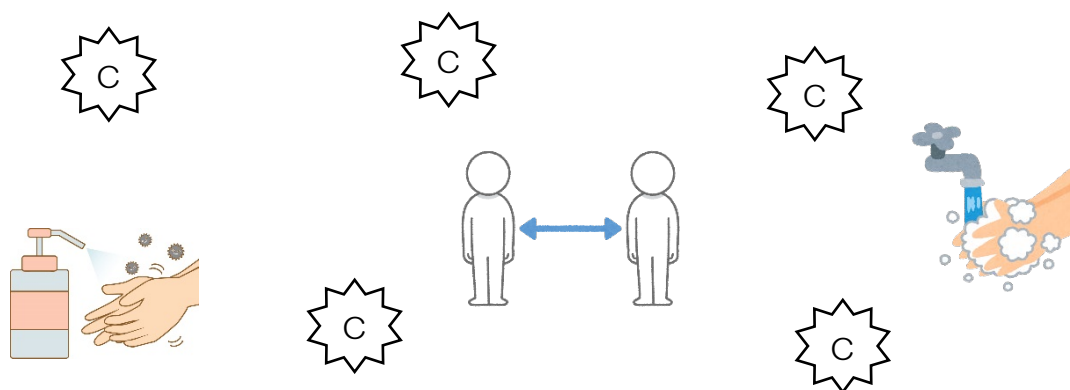
2. 小地域福祉活動とウィルス感染対策について

小地域福祉活動やボランティア活動に取り組んできた方々は、活動の中止が相次ぎ、戸惑いや葛藤、やり切れなさ、自治会や地区福祉委員会などの役員の皆様や福祉協力員などの方たちは、地域住民さんの声と活動自粛の中で板挟みになりながら、一方で自分自身の健康や暮らしにも不安を覚えながら、複雑な気持ちの中で過ごされていることと思います。

区民が集い、ふれあい、顔を合わせて交流する活動が制限され、自治会役員等が集まって協議を行うことさえも難しく、先が読めない状況があります。

そうした状況にあっても、区民同士のつながりが途切れることなく、お互いの暮らしを気にかけて合うには、何ができるのか。今まで活動されてきた小地域の福祉活動を見つめなおし、発想を転換しながらより良い方法を考えていくための参考にさせていただきたくこのガイドをまとめました。

ここで紹介する方法は、「こうすればすべてうまくいく」という方法ではありませんが、これからできることを考えるためのヒントにいただければ幸いです。



ウィルスの感染拡大というこの事態は、誰もが当事者になる可能性があり、多かれ少なかれ感染リスクがあったり、自分が広げてしまう側になるかもしれないという不安を感じていることもあったり、自分ごとに感じる問題となっています。自治会役員の方たちや小地域の福祉の活動者の方たちも、まずは一人の生活者として、自分や家族の暮らしを第一に、健康管理や感染防止に十分留意しながら、決して無理しないことが大切です。

そのうえでこれまで活動を通してつながってきた人や、同じ地域に住む人へ、今できること、そして今後に向けて必要なことを、無理のないタイミングで、できることから考えていきましょう。

3. ウィルス感染対策を考慮した住民同士のつながりづくり

ウィルス感染の拡大防止に向けて、体調管理や衛生管理、咳エチケットの徹底、こまめな換気、3つの密（密閉、密集、密接）の回避などの対策を講じながら小地域福祉活動を推進していく方法を以下に整理しました。

（１） 電話でつながろう

- これまで活動に参加していた方の安否確認や、メンバー間のコミュニケーションのために、日頃から使い慣れている電話は有効です。特別な用件はなくても会話することで、閉じこもりがちな生活の中で「誰かが気にかけてくれている」「つながっている」という気持ちが芽生えるものです。
- 特にこれまで見守りや、居場所づくりの活動を通して、気にかけていた人（一人暮らしの人など）についての情報を改めて整理して、個別に連絡することは、お互いの安心感や、何かあったときに SOS を出せる関係につながります。



（２） 手紙・届けものでつながろう

- 町や地域の活動状況などをお知らせするおたより（ニュースレター）、会えなくなっている参加者へのメッセージカードづくりなどもあります。メッセージを書くにしても、一定のフォーマットをつくるなど負担にならないようにして、そこに一言メッセージを添えるのもひとつの方法です。衛生物品などを組み合わせて配付することも考えられます。
- 活動者の運動を兼ねて戸別にポストインして歩いたり、玄関先や家の様子からさりげない見守り活動を行うこともできます。
- 手紙や届けものは、一方通行になってしまう場合もあるので、前後に電話連絡を併用したり、ポストインする際に、インターホン越しに一言交わすこともできます。また、返信用の手紙などを合わせて届けるなどをし、その返信によって安否確認や近況報告を共有するといったことも可能になります。



(3) オンラインでつながろう

- ・SNSツール等を使うことで、会わずしてできるコミュニケーションの幅が広がります。メールや LINE（無料メッセージアプリ）は多くの人になじみがあると思います。あらためてメンバー間でのコミュニケーションツールとして使い方を見直したり、工夫次第では見守りのツールになるかもしれません。



- ・さまざまな会議が開催しづらい中で、オンライン会議用アプリも注目されています。例えば、Zoom やS k y p eなどを使えば、インターネットを通して会議やセミナーを主催したり、参加することができます。メンバー間のミーティングや、団体間のネットワークによる情報交換などにも活用できます。

「聞いたことはあるけど、できるかな…」という人は、地域の若者などにも聞いてみたり、練習を兼ねてよく知っている人同士2～3人から試してみたり、参加を呼びかけられたときには臆せず乗ってみることをおすすめします。

- ・こうしたツールの活用に関心を持った人や若い世代、あるいは調べれば活用できる人を見つけて、新たに取り入れることで、今後の活動に若者や今まで地域活動になじみの薄かった方の参加を促進することができるかも知れません。

（上記アプリはいずれも無料で使用できるメニューがありますが、あくまで民間企業が提供するサービスであり、一部有料のプランもあります。また、上記に示したアプリはあくまでも一例です。それぞれの最新情報を確認のうえ、ぜひ自分たちの活動に合ったサービスを探してみてください）

【Zoom 参加マニュアルを竜王町社協でも作成していますので、必要な方は社協までご連絡ください。】

(4) うちでできることをシェアしよう

外出自粛は緩和されてきましたが、自宅に居る時間は以前よりも長くなっているかも知れません。以前とは少し違ってきている暮らしの中で、身体機能が低下したり、気持ちが沈んだりする人が増えることも懸念されます。そのような中、集いの場に参加していた高齢者に向けて、家でできる体操や脳トレを掲載したプリント、毎日の日記をつけられるようなプリントを配付し、暮らしに刺激を持ってもらうことも可能です。また、手芸ができる人がマスクの手作りに取り組むと地域社会に貢献することにもつながります。（竜王町社協ではマスクくる活動（ボランティアでマスク材料を集め、ボランティアで手作りマスクを作成し配布する活動。ボランティア募集中！）を実施しています！）

(5) 地区集落センターや公民館などに集まって行う活動に向けて

地域住民から集いの場を求める声は、少なからずあるかと思います。色々な対策を講じながら、他の地区の状況を聞いたり、自分たちの地区としてどのように対応を行っていけば良いか、頭を悩まされていることと思います。

集いの場を行う際の新たなルール作りや感染防止を考慮した対策チェック項目をまとめました。

集いの場を開催する際のチェック項目

●開催に向けて考えておくべきポイント

- 集いの場の目的を確認する（見直す）。
- 集いの場の開催方法を確認する（見直す）。

新たなルール設定

- ・発熱時（37.5℃以上もしくは、平熱より 1℃以上高い）、風邪症状がある場合は自宅療養してもらう。
- ・マスクもしくはそれに類する布により咳エチケットの対応をする。
- ・手洗い、うがい等の予防対策を今まで以上に徹底する。
- ・1 時間に 1 回以上程度、数分間の換気を行う。（換気の悪い場所は使わない）
（必要時には扇風機等を使用するなど換気に心がける） など
- スタッフ同士のコミュニケーションを強化する。
- 集いの場に来ていた人たちの足を遠ざけない。
- 新しい参加者や協力者を得るチャンスに変える。
- 地域の理解を得ながら開催する。
- 役場や社協などと連携する。

●広報（チラシ等）に盛り込む内容

- 参加費は、おつりの必要が無いよう呼びかける。
- 具体的な内容と安全策をほどこしていることを説明する。
- 参加者多数の場合には入場を制限・断る場合があることを明示する。
- 気になることがある場合の問い合わせ先を表示する。
- 身体的距離がある程度が取れる人数にすることを表示する。
- 可能な場合には、事前予約制にし、参加者を把握する。
- マスクの着用、体調が悪い人は参加しないことを表示する。
- 備え付けの上履きがある場でも、上履き持参を呼びかける。

●当日の材料や備品の準備

- 消毒しにくい形状の物は使用しない。
- マスクや手袋、消毒剤などを十分準備する。
- 伝えるべきルールについてわかりやすい掲示物を作成する。
- 使い捨ての物品（紙コップなど）を使用する。
- 道具や材料は共有しないように、個別に用意する。
- 当面は、食事や茶菓子等の提供を避ける方が良い。

●プログラムの準備

- 屋外や建物のテラスで開催出来ないか検討する。
- 身体的距離が保てる内容を企画する。
- 歌を歌ったり、息が荒くなるプログラムは控えるようにする。
- しばらくは時間を短くした内容を実施する。
- 参加できない人のため、オンラインで参加できるか検討する。
- 大声で指示せず、マイクかポスター・ボードで説明する。
- 会場の大さにあった適正人数に限定した内容にする。
- 固定したスタッフ・メンバーで運営するよう検討する。

●スタッフのトレーニングと危機管理

- 衛生管理面で注意すべき点、備品の使用方法を学習する。
- 開催日に確認する項目をリストアップする。
- 特に人が密集、接触しやすい内容や時間帯の対応を話し合う。
- 体調不良者が出た場合の休息場所や付添い者を決める。
- 体調不良者が出た場合の連絡、指示体制、流れを確認する。

●会場の準備

- 使用開始前に複数の人の手が触れる場所や物をしっかり清掃と消毒し、換気をする。
- チェック項目の確認と、消毒をする箇所に目印をつける。
- 衛生備品を使う度に、人が移動する必要がないよう十分な数を配備する。
- 椅子は可能な限り2mの間隔を保ち、不要な資材は出さない。
- 対面を避け、横並びで座るなどの工夫を行う。
- 子どもがいる場合には、子ども用の除菌剤などを用意する。
- テレビのリモコン、本などいろいろな人が触る物品は置かない。

●受付

- 参加者が一度に入場しないよう、スタッフが整理をする。
- 入室時刻、検温を記録し、体調（咳、倦怠感など）を聞く。
- 参加費は直接箱などに入れてもらい、後日消毒する。
- 本人に名簿の記入はしてもらわずに、スタッフが記入する。
- 荷物置き場を決め、荷物同士が接触しないようにする。
- 杖、車いす、ベビーカーなど他者が触れないように置く。
- ドアや手すりは、スタッフが随時消毒する。
- マスクを持参していない場合は、マスクを支給する。
- 入口に衛生管理に関する注意書きなどを掲示する。
- 参加人数が多いと感じる場合、お帰り頂くなどの対応をする。

●プログラム開始時

- 開始時に、まずは参加者の最近の体調や様子を尋ねてみる。
- ルールは、具体的な物を示して説明したり、やって見せる。
- 以前なかった換気機材などがある場合には、注意をうながす。
- 身体的な間隔の距離を 参加者同士で確認する。
- 体調がすぐれない時の対応を説明し、担当者を紹介する。

●プログラム中

- ☐ 手洗いを促し、身体的距離の確認をする。
- ☐ 参加者をグループに分け、グループ間の移動や接触を減らす。
- ☐ 会場の出入り口、トイレなども定期的に消毒する。
- ☐ 途中で、窓を開けたり、扇風機などで換気する。
- ☐ 飲食物は、トレイにて持ち運びをし、参加者に手渡ししない。
- ☐ マスクを着用して運動を行う場合、特に暑くなる時期は、こまめな水分補給を実施する。

●プログラム終了時

- ☐ プログラムの感想や不安な点はなかったかななどを聞く。
- ☐ 一斉に参加者が帰らないよう、時間をずらして退出させる。
- ☐ 個人が消費した飲食物のゴミは、各自持ち帰りとする。
- ☐ 終了時の体調確認と手洗い・消毒を励行する。

●プログラム終了後

- ☐ 会場の清掃を行い、消毒する。
- ☐ 反省会を行い、問題点などを話し合い、次回の改善につなげる。
- ☐ スタッフ同士で、お互いにねぎらい、心のケアをする。
- ☐ 参加者の肯定的な声は全員で共有する。
- ☐ その日の参加者数、課題などを、専門職などにも報告する。

※このチェック項目は、ウィルスの感染防止を考慮しながら集いの場を実践していくための考え方のヒントを示したものです。

また、これらの内容すべてを実際実践するとなるとハードルがかなり高くなることも考えられますので、先ずは、それぞれの集いの場の目的や対象、内容、運営方法などに応じて、必要な部分を抽出してできることから実践していただければと思います。

※開催（再開）するにあたっては、地域の理解と協力を得ることが重要です。

4. 今だからこそ考えられる新たなつながり方

小地域福祉活動で、特に集いの場の活動（おたっしや教室、いきいきふれあいサロンやコミュニティカフェなど）は、この感染症ととても相性が悪く、さまざまなつながりが阻害されてしまう状況にあります。

しかし、考え方を変えると、この感染症以外にも、物理的な距離があるとき、時間が合わないとき、災害時など、「集まらない状況」は起こり得るものです。また、身体状況により集まりの場に出向けない、あるいは家庭の事情で家を離れられないなど、「集まりづらい人」もいます。

このピンチを少しでも前向きに捉えたとすれば、ここで紹介した「3. ウィルス感染対策を考慮した住民同士のつながりづくり」は、実は「日頃からの集まらない状況や、集まりづらい人のための選択肢を増やす可能性がある」と考えることもできます。

例えば、集いの場の参加者のうち特に気になる人の連絡先を整理しておくことで災害時・緊急時の安否確認がしやすくなること、また、会議にオンラインでも参加できるようにすることで直接出向くことができなくても意見を言える人が増えることなどが考えられます。

このような試みを取り入れることで、長い目で見たときに、人と人とのつながりが弱まるのではなく、今までの集まり方に新たな要素——例えば、気になる人への見守り、ちょっとした困りごとへの助け合い、災害時の対策、さまざまな場にアクセスしづらい人の社会参加——が付け加えられたり、小地域福祉活動をより充実していくことにつながります。

そのためには、今までのメンバー、今までのやり方だけではなく、若者世代などから新たな仲間を加えて一緒に知恵を出し合ったり、さまざまな強みを活かした新たな協働に一歩踏み出すきっかけにもなるかもしれません。

おわりに

繰り返しになりますが、活動者の方は、まずは自分自身の暮らしを第一に、焦らず、無理をしないようにお願いします。

そして、ここで紹介した方法があるからと言って、直接顔を合わせてコミュニケーションをとること、みんなで集まることの価値は決して変わるものではありません。



社会が大変な状況で、色々と気配りや気遣いが必要ではありますが、改めて人と人との気にかけて合う心やこれまで積み重ねてきた活動への思いを再確認しながら、また笑顔で集まることを喜びながら、さまざまな“アイデア”や“チャレンジ”を共有して、新たなつながりづくりをできることから少しずつ進めていきましょう。

【作成にあたっての参考資料】

- ・新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止に配慮して通いの場等の取組を実施するための留意事項について（厚生労働省老健局）
- ・新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止に配慮して実施する介護予防・見守り等の取組例について（厚生労働省老健局）
- ・通いの場×新型コロナウイルス対策ガイド（東京都健康長寿医療センター研究所）
- ・集まれなくてもつながる方法（大阪市社会福祉協議会）

小地域福祉活動について お気軽にご相談ください。

竜王町社会福祉協議会

電 話	0748-58-1475	
F a x	0748-58-3739	
E - M a i l	ryu-shakyo@rmc.ne.jp	
ホームページ	『竜王町社協』で  または、こちらからご覧いただけます。 ⇒	
L I N E 公式アカウント	(情報発信用：友だち登録をお願いします。) ⇒	